

# 協同の叢見

きょうどうのはっけん



第283号 2016.6

## 特集

## 多世代協同の持続可能な地域づくり ～「小さな拠点」と「協同労働」～

- ◎社会的困難を抱える当事者を中心にした仕事おこしと地域づくりの主体形成 竹森 幸太
- ◎登米市におけるワーカーズコープの地域づくり協同実践の展開に向けて 大高 研道
- ◎地域再生法の概要 - 明日が確実に失われてゆく時代、何をなすべきか - 島村 博

### ■協同の広場

協同の力で地域を創る (2016神奈川協同集会 in 小田原)

- ◎報徳思想の現代化を飾る小田原実践の運動の拡がり

- 協同の力で地域を創る2016神奈川集会 in 小田原総括 - 成田 誠

- ◎分科会1～分科会6、特別分科会報告

### ■海外レポート

資料から読むイタリアの社会的経済(14) 経営危機に直面した企業を労働者協同組合によって再生するワーカーズ・バイ・アウト② 田中 夏子

### ■会員だより

暮らしの共同の文化とその継承を支える教育を探究して 岡 幸江

### ■ワーカーズコープで働く若手リーダー紹介(第5回)

協同労働の協同組合づくりの挑戦 馬場 義竜

一般社団法人 協同総合研究所

JAPAN INSTITUTE OF CO-OPERATIVE RESEARCH

題字／藤原 桂州

## ■巻頭言

「志」を育む多世代のつながり

..... 佐藤 一子(東京大学名誉教授/会員) 2

## ■特集 多世代協同の持続可能な地域づくり～「小さな拠点」と「協同労働」～

・社会的困難を抱える当事者を中心にした仕事おこしと地域づくりの主体形成

..... 竹森 幸太(センター事業団 登米地域福祉事業所 所長/会員) 5

・登米市におけるワーカーズコープの地域づくり協同実践の展開に向けて

..... 大高 研道(聖学院大学政治経済学部 教授/総研常任理事) 13

・地域再生法の概要－明日が確実に失われてゆく時代、何をなすべきか－

..... 島村 博(一般社団法人 協同総合研究所 主任研究員) 22

## ■協同の広場

協同の力で地域を創る(2016神奈川協同集会 in 小田原)

～誰もが共に生き、働くことのできる持続可能な地域社会の創造を～

・報徳思想の現代化を飾る小田原実践の運動の拡がり

－協同の力で地域を創る2016神奈川集会 in 小田原総括－

..... 成田 誠(センター事業団神奈川事業本部本部長/会員) 31

・分科会 1 持続可能な地域経済と報徳思想～道徳経済こそ未来の希望～ ..... 40

・分科会 2 再生可能エネルギーが新しい社会を創る～市民の力によるエネルギー革命～ ..... 42

・分科会 3 誰もが生きられ、働くことの出来る社会へ～孤立・分断・排除を超えて～ ..... 44

・分科会 4 人口減少を希望に～小田原・足柄から始める新しい地域づくり～ ..... 48

・分科会 5 子育ての社会化と協同の力による子育て・親育ち ..... 52

・分科会 6 農のグローバル化を超えて～地域・生産者・消費者が共に支える地域農業～ ..... 57

・特別分科会 映画「未来シャッター」を通じて地域の未来を共に考える

～自分たちの未来は自分たちでつくる～ ..... 62

## ■海外レポート

資料から読むイタリアの社会的経済(14)

経営危機に直面した企業を労働者協同組合によって再生するワーカーズ・バイ・アウト②

..... 田中 夏子(協同組合研究者/農/総研理事) 64

## ■会員だより

暮らしの共同の文化とその継承を支える教育を探究して

..... 岡 幸江(九州大学大学院人間環境学研究院准教授/会員) 71

## ■ワーカーズコープで働く若手リーダー紹介(第5回)

協同労働の協同組合づくりの挑戦

..... 馬場 義竜(企業組合はんしんワーカーズコープ代表理事/会員) 77

■連合会だより..... 田嶋 康利 82

■研究所だより..... 相良 孝雄 86

## 巻頭言

## 「志」を育む多世代のつながり

東京大学名誉教授 佐藤 一子

少子高齢化の急激な進行で、農山漁村の地方自治体はどこもみな頭を悩ませている。定住促進、交流人口拡大のためのアイデアをしぼっているが、同じような方策をうちだして、互いに競い合う関係になってしまう。とりわけ東日本大震災被災地では、復興をめざしながらも、避難した若い世代が帰還できるまでにはまだまだ解決すべき問題が山積している。「人口減社会」のリスクに振り回されずに、足元を固め、長期的な展望にむけてとりくむにはどうしたらよいのだろうか。

地方自治体を訪れて、交流人口が広がっている地域、とりわけ若者のU Iターンが目立つ地域の様子をみると、そこには共通する地域づくりのプロセスがあることに気づく。自分たちの手で地域を次世代につないでいこうとする住民主体の時間をかけたとりくみと、その過程で一緒に活動していた子どもたちが自らの「志」を育み、その「志」を形にしていくために自立的な地域の担い手になっていく相互の育ち合いのプロセスがみられるのである。地元特産物の魅力発信や観光振興などの地域経済振興とは異なる、「人が育ち、多世代が交流する

地域づくり」に重要な鍵があると思われる。

近年、「教育」という用語は、学校とイコールのものとして理解されるどころか、「進学」という狭い理解に置き換えられる傾向さえみられる。「進学」のために地域を出て行く若者の選択を応援するという価値観で家庭も学校も地域も一体化しがちな状況に対して、かつて異をとこなえた教師がいた。兵庫県の小学校教師、東井義雄である。「村の子どもが、村には見切りをつけて、都市の空に希望を描いて学ぶ、というのではあまりにもみじめすぎる」。そういう「村を捨てる学力」ではなく、「村を育てる学力」を身につけることこそ大切ではないか。東井は当時、国をあげてひろがっていた高度経済成長期の学力主義的な学力観に対置して、村の人々が育ちあい、共に支え合って生きる生き方を学ぶ教育を実践しようとした(東井義雄『村を育てる学力』明治図書、1957年)。生活記録の方法で地域の暮らしをみつめ、互いに話し合い、地域の人々の生き方に学ぶことによって、子どもたちは自らの生き方のよりどころを深く認識していく。

今、地元に残る選択をしている若者、都

会からUIターンしてきた若者たちと話しみると、その選択の根拠として「子どもの頃からいろいろな人と出会えて、自信が ついた」とか「この地域でやりたいことがあって、すんと胸におちる」などの言葉が聞かれる。自分が育つ過程で出会っている地域、そこでふれあっていた多世代との関係性について、他に代え難い価値を見出しているのである。そして、そういう言葉を発する若者たちの背後には、地域の価値を活かしてよりよく生きることを懸命に模索している大人達がいる。環境としての地域ではなく、人々が共に創りだしている地域の中で多世代がまじりあって育つというプロセスこそ重要である。

たとえば岩手県遠野市では、40年以上にわたって「遠野物語ファンタジー」という市民劇が実行委員会の手で毎年上演されている。遠野に伝わる民話に題材をとり、市民が脚本を書き、音楽も創作する。舞台のキャスト以外に地元小中高校の音楽部の演奏、バレエや郷土芸能など、毎年300人近いスタッフが上演、あるいは裏方をつとめて、2000人以上の観客が舞台をみる。毎年2月の上演で、練習は11月ごろから始まる。制作委員会は市民が20人ほどで通年の活動をしている。この舞台に子どもの頃から参加していた若者は、「ほんものの感動があるんです」「進学で出て行っても、必ずこの舞台に出るために戻ってきます」と、誇らしげに心の確信を語る。

当初、この市民劇を発想したのは市の社

会教育課の職員であった。彼は、学校と社会教育の交流がなくなって、学校だけの教育で果たして「地域で子どもが育つ」ことは可能なのだろうかと疑問をもつ。学校と地域が一体となって、子どもから大人まで、共に舞台を創り上げよう。その提案が市民、学校、文化団体の協力で実現され、商工会や地域婦人会、市の行政などの支援で40年以上も持続している。

農村部には、本来、共同体の力に支えられた習俗としての子育てが継承されてきた。多世代の交流は子どもが大人になっていく上で、必須の関係性をなしていた。しかし、1960年代以降、その習俗はほぼ完全に消えうせている。それに代わって、今、「志」を育む多世代のつながりを実現しているのは、共同体を超えた主体的な協働である。そこには、地域の価値の再発見、創造的發展、UIターンを含む多世代の協力、次世代につないでいこうとする共同意思の形成など、新たな対話的交流空間が形成されている。「地域文化」はその対話の媒体としてとりわけ重要性をもっているといえる。遠野では、100年以上前から、人々が交通し交易して、世間話を伝えるコミュニケーション文化があったといわれる。

今、自分たちの「志」を世代を超えて伝え、共に育むことができるような多世代の関係性、交流空間をどう生み出し、何十年も持続させることができるのか、創造的協同の発展が期待されている。



協同総合研究所は、労働者、市民が自らの力で自律的に仕事と生活の豊かさを求める活動を支援するシンクタンクです。わが国にも「大量失業の時代」が到来する中で、労働者、市民が自主的に仕事おこしをする労働者協同組合(ワーカーズコープ)への注目が増えています。研究所は、わが国唯一の「労働者協同組合」に関する専門研究機関です。



研究活動をネットワークし、蓄積された情報を資源として支援する「協同の発見」を会員のみなさまに毎月お届けいたします。